
神による原作介入

イトマル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神による原作介入

【Nコード】

N5819R

【作者名】

イトマル

【あらすじ】

人を神が誤って殺して能力与えて異世界へ……
なんて一方通行吹き飛ばせ！！

神による原作介入物語！！ 介入は結構後？

神 ネギまへ行く(前書き)

まだ序盤の物語が残っているのに！！書いちゃった！！

神 ネギまへ行く

「暇だ……」

今俺は何処にでもあると思う一軒家の一室でゴロゴロしている

「SS小説ねえ〜てかなんで人が行くのに神は行かないんだよ……」

先程読んだSS小説の感想文である

「う〜ん……あつ！俺神じゃん一応」

因みに今の此奴の居場所

日本

東京都

のどつか

である。

……何故神がこんなところにいるのかは後々分かるであろう

「なら俺は行くぜ！！やつぱ行くんなら……」「ネギま」だべ！！
では早速

――創造

――ネギま！！！！

すると小瓶の中に宇宙空間が広がった、何故小瓶かは謎である

「よっしゃ出来た！！っと、時間帯は・・・まあ久々に修業もした
いし原作2000年前でいいか」

神なので2000年も短いのである・・・多分

「よし！神威 神行つきまーす！！」

そして 絶対神 が小瓶に吸い込まれていった

神 ネギまへ行く（後書き）

感想お願いします

主人公説明（前書き）

地震は怖かったぜ・・・

訂正しました

主人公説明

名前 神威 神

性別 男（女のもなれる）

年齢 不明 但し1000兆年以上生きている

容姿 全宇宙、全世界、全次元の中で最高の容姿をしている

金髪金瞳である

髪は切るのがめんどくさく腰まで伸ばしている

この容姿のため、一度外に出ると異性から婚約をせまられるので外出するときは仮面をかぶっている

性格 何気に努力家

興味を示さない物にはどうでもよくなる

音は優しい

設定 神は神でも「絶対神」である。何が違うのかというと神を創ったのが神威であるからである。最高神であるゼウスを最初に創った。長年（100億年）神界をほったらかしにしていたため一部を除いて忘れられている

ステータス

魔力：無限

気：無限

耐久力：EX +

筋力：EX +

俊敏：EX +

運：EX +

ぶつちゃけデコピンで惑星を破壊出来る（やらないが）

折角ネギまに来たので、ネギま系の魔法を使うことにしている？

魔力は神力を変換したものである、それにより魔力が人のもの
との質がかけ離れており魔法の射手 一矢が千の雷1万発分に
匹敵する

能力

森羅万象・・・世界総てに影響出来る

神眼・・・嘘を見通し次元の果てまで見ることが出来る

創造具現化・・・資材を全く必要しないで具現化が出来る

絶対服従・・・対象の生物を従わせる

言語理解・・・翻訳こんにやくの能力バージョン

全センス・・・何でも完璧にこなすことが出来る

オリジナル魔法（発動キー エルス・ゼル・デルド）

滅神砲

呪文 エルス・ゼル・デルド 神を喰らい 神を恐れさせ 神を消
せ 滅神砲

神力の力で発射する魔砲、比喩無しで眼前のもの総てを消滅させる

次元防壁

次元をねじ曲げ相手の攻撃を相手に返す

奈落と浄土の暴風

呪文 エルス・ゼル・デルド 敵を燃やし尽くし 暴風で吹き飛ば
し 味方を癒すそよ風となれ

半径100キロを業炎の暴風で敵燃やし尽くす、しかし自身を味方

と認識している者には傷を癒す風となる

主人公説明（後書き）

今のところオリジナルは三つだけです
しかしこれから増えます

修業？（前書き）

短いですね・・・

修業？

「魔法の射手 光の一矢！！」

ガアアアアアアアアアアン！！

そして神威のいる何処かの惑星の3分の1が消失した

「だぁ~~~~！！！！またか~~~~！！！！ただの魔法の矢なのに
どんだけ威力が高いんだよ！！！！」

今現在進行形で修業？をしている神威です。いや、修業するため
に安全のため生命体のいない惑星に来たのはいいんだけど・・・何
だろうね・・・魔法の矢を試し射ちしたら（神力でね）俺が
いた惑星と周囲にあった惑星が全部吹き飛んだんだよね・・・と、
いうことで今力の加減の訓練をしています。神力で魔法の矢を射
つと力の加減も糞も無いんで神力を魔力に変換して射ってんだけど
それでも惑星一つは軽く消滅しちゃうんですよ。理由は多分俺の元
々の神力が他の神と逸脱してる質の力だから魔力に変換したらその
分普通の魔力より圧倒的に強力になってしまうからだ。

「にしても地球とかで修業しなくて良かった、原作始まる前に終
わらせたら元も子もなかったよ、ってかどうする？このままじゃ
あつちで魔法を使おうにも使えないじゃん！~~~~~ン・・・・・・
・・・・・・」

ポン ポン ポン チ~~~~ン!!

「そっだ!! 『封印』すりゃいいじゃん!!」

この結論までに千年かった

「そんじゃ早速『封印』」

神威は9割ほどの力を封印した

「よし!これなら魔力の微調整が出来んな!!」

何故微調整をするかというと根本的に魔力の質が違う為、魔法の
矢を射つ為の魔力の1万分の1程にする必要があるからだ

・惑星の消滅×一億

・・・・万人が思うであろう神威は「馬鹿」であると

「これで行けるぜ・・・待ってる『ネギま』!!」

そして神が地球へ向かった

修業？（後書き）

感想お待ちしております

金髪少女と銀髪少女

「ん？どうしようかな？・・・」

「おい貴様は何者だ！！答えろ！！」

は？い今俺は杖を持った怖い大人達（20人かな）に囲まれてます！はい・・・魔法使いさんですね・・・いやね

大気圏を生身で突入したかったんだよ！！・・・まあ抜けたはいいけど何か止まなくて亜音速並の速さで地面にダイブしちゃったんですよ、はい・・・

んでまあ結果は馬鹿デカイ騒音を立てて半径1キロ位のクレーターをつくっちゃったんですよ・・・てへっ

・・・そしたらまあ当たり前だけど、この謎の現象を調査しにきた人が来て俺を見つけて

こっとなったんですよ

だが俺の自己満足に反省は無い！！後悔も無い！！したかったんだよ！！悪いか！！

で、なんで困っているかというと

俺のことを何者かと怒りながら言うてくる

← 神だ何て言えねえ

← あやしい奴だと魔法を使つてきそう

← 逃げるか

← 駄目だ賞金首になつちまう

← 魔法を使つて追つ払うか

← コツを掴んだとはいえ下手したらここら一帯が吹き飛ぶ

← 賞金首

← うゝんどうしよう

つてわけだ

「はてさて自業自得とはいえどうしよか・・・」

分かつてるじゃないか

「ん、何か馬鹿にされた気がする」

「いきなり独り言を・・・怪しい奴め正義の名により死ね!!」

ええっ！何か独り言のせいで殺されそうなんだけど!! まあ傷一つ

付かんけど

一斉に魔法使い達が呪文をし始めた

「んゝどうしよっかなゝ」

呑気だ

「死ん「お前らがな」なっ！きさmぐあああー！！」

なんかちっこい金髪少女と同じくちっこい銀髪少女が飛び出して来て【こおるせかい】と【燃える天空】で正義を名乗った魔法使いさん達を消滅してくれたぞ？ラッキー？

「さてじゃあ俺はおいとまさせていたd「駄目だ」ですよゝ」

お二人方が俺に立ち塞がった

っち逃げれんかったか

「で何で俺に何の用で御座いましょうかな？」

「何かあんたムカツクわね、てゆうか何で仮面何て被ってんの？」

銀髪少女が聞いてきた

「ん？ファッションだファッション」

「ふゝんやっぱあんたも転生者でしょ」

「！！！！も、とは？」

「私も転生者なのよ」

まじか・・・転生何て架空のことだと思ってたんだが・・・俺が1兆年も神界をほったらかしにしたからか？ゼウスめ何やってんだ？

「転生者・・・ではないなってか何でわかったんだ？」

「服装と登場の仕方つよ、てゆうか転生してここにきたんじゃないの？」

「ああ服装か、つと俺は転生じゃなくて意図的に来たんだよ」

「「はっ？」」

何かハモってんぞ

「てか、お前エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルか？」

「あ、ああじゃなくて意図的とはどういうことだ！？」

反応を見る限り銀髪幼女（転生者）から話を聞いているみたいだな

「ん」とねまず元からあったこの平行世界を家にあった小瓶の中に移動させて「ちよつと待って世界を移動させたの！？」ああそだよ、そんで中に入ってここに来たんだよって言うっても地球に来たのは5分前何だけどね」

「5分前？じゃいままでどこにいたんだ？」

「適当ないろんな星で修業してた」

「はっ？いろんな星・・・ってまさかあれはお前だったのか！！」

「？アレとは？」

「昔から多くの星が爆発して消滅していく現象で【世界の終わり】
と言われ恐れられてたんだぞ！！」

「へえゝ此処からでも視認出来たんだ、確かにそれは俺だな力の加
減が難しくて消滅させちまったんだよ」

「まさか今度はこの星を破壊に来たのか！！」

「いやいやいや、この星を破壊させないように修業してたんだよ！
最近星を破壊してないのが修業の成果だ！」

「確かに最近はないが・・・だったら何でこの星に来んだ？」

「さあ？」

「は？」

「確かにこの星にくるのが目的だったんだが理由は覚えてねえゝな」

「アホか」

「五月蠅い」

「・・・あんたもかして神？」

さつきから黙っていた銀髪幼女が口を開いた

「・・・何でそう思う？」

「あんたは世界を操れるこれは神しかできないわ、あと星を破壊出来るほどの力何て私は神ですよと言っているようもんじゃない」

「くつくつくまあな一応神かな？」

「!!!!・・・本当か？」

「ああ別に俺は神みたいに傲慢じゃないし立派な紳士だぞ？そこんとこ宜しく」

「いやお前神だろ」

「一応だからな」

「・・・であんたこれからどうするの？」

「んゝどうしよっかなゝ特にしたいこともないし・・・そうだ！俺も一緒に連れてつてくれよ」

「駄目だ！！お前は危険過ぎる！！」

「大丈夫だ！！危険は無い！！多分・・・」

「今多分って言っただろ！」

「なら、お前らの望みを何でも一つずつ叶えてやるから頼む！」

「「いいわ（ぞ）！！」「」

目をきらめかしながら同意した

「ふっ、神で良かったぜ」

神権乱用である

こうして神の旅が始まりました！！

金髪少女と銀髪少女（後書き）

感想は作者のパワーの源です

自己紹介& a m p・真祖の吸血鬼にジヨブチェンジ

「それでは自己紹介合いをしたいと思いまゝす」

「誰に言ってるんだ」

「いや何となく」

場所は変わって今俺達がいる場所は即席で創った126LDKの豪邸（チロルチョコ並の大きさになるよう空間をいじってます）にいまゝす、しかもなんと！光学迷彩+αを取りえており世の中から忘れられない人物にうってつけの豪邸なのである！

そんで今「無駄馬鹿デカ豪邸」の中の牧場並の広さのリビングにいるよ！

「それより此処はどこいきなり転移させるな」

「即席で創った別荘だよゝん」

「はっ？ああお前はマジな神だったな」

・・・エヴァはなんかひどい

「まあそういうことは置いて自己紹介ね、俺の名前は神威 神だ、年は・・・不明だなこの次元に来たのは1500年前だから1500歳ってことで」

「で、それから惑星破壊人になったと」

「言い方が酷いな・・・」

飲まず食わずで頑張ったんだぞ！

「にしても全知全能の神が手加減如きで時間がかかり過ぎじゃない？」

「それはだな俺が持つてる能力の【全センス】ていうのがあるんだがまあ名前どうり何でも神レベルでできちゃうんだよ」

「じゃ——」

「しか~~~~し！！そんな簡単に何でも一発で完璧に出来たらつまらんのだよ！！なので【全センス】を封印しているのだ！！やっぱ努力は大事だね！」

「よし分かったお前はアホだ」

「ひ、酷い・・・」

なんだよ！神にチート貰って努力しないで最強になる奴などより百倍いいだろ！（はい、あんたは存在自体が最強過ぎです、あとあんたは「強くなる」じゃなくて「弱くなる」努力をしてるんじゃないか）

「因みに1500年間何の努力じゃなくて修業をしてたんだ？」

「魔法の射手 一矢」

「「だけ（か）？」」

「だけ」

「「ぷっ、はっはっはっは！！！」」

「一矢に1500年かけたのか！くっくくくくく！！！」

「あんたほんと神？ぷっ」

・・・鬱だ死のう

「【全センス】封印してると逆に【全センス×】がつくんだよ・・・
・真ん中がねえんだよ！！こんちくしょう！！！」

「だが一矢で惑星を破壊出来るとは、まあそこは規格外だなぷっ」

「そこだけありがとよ！！・・・グスン」

「それじゃあ私の自己紹介をしようかな、名前はエルス・S・マク
ダウエルよSのイニシャルはシルヴィよ、わかんと思うけどエヴァ
と双子よ」

「へえゝ双子かゝどうりでゝ」

この双子髪の色の違い以外ほぼ同一人物なんだよね、ここまで似て
ると賞賛に値するね

「転生時の特典とか貰ったのか」

「いやない」

けちな神だな

「で二人共真祖の吸血鬼なんだよな」

とたんに二人の目付きが変わった

「そうだ」

ふーん・・・

「じゃあ俺も真祖の吸血鬼になるかな」

「「はっ?」」

はもったはもった

「いや俺だけ神ってKYじゃん」

「いやそういう問題じゃないでしょ!」

意見は聞かんぜ!!

「チエンジ!!真祖!!!!」

まばゆい光が僕らを照らした

シュ~~~~~

そして何も変わらない姿の神威が現れた

「いや何も変わってないじゃん」

「じゃあ血吸ってみ」

それが1番手っ取り早い

結果

「・・・ああ、真祖の血だ」

「ほんとだー、やっぱあんた神なのね」

「だからああそうだったみたいな反応止めろ」

まあ「一応」なんだけどな

「神が吸血鬼だと・・・」

「まあエヴァ、俺はこれから同じ仲間（吸血鬼）として宜しくな！

「！」

「・・・まあいいかそれでは私の自己紹介を「知ってるからいいや」
っておい！私だけ酷いぞ！」

自己紹介合い終了!!」「おい!!！」

仮面

「で、その仮面はなんなの？」

自己紹介も終わり先程の約束を果たそうとしていたんだが、ん？約束？流れ星が落ちている間に3回願い事を呟くっていう迷信があるが俺こと神はお二人の願いごとをちり紙をゴミ箱に投げ捨てるが如く叶えてやろうというものだ。
だが条件はつけさせてもらった、

一つ、転生の類は出来ない

二つ、此の世界全体を変えるようなものも駄目

三つ、この「ネギま」の物語を変え【過ぎる】ものは駄目

の三つである

この三つ目の中の物を実行してしまうとこの世界の管理者〃神に「俺」がいることがバレてしまうからだ、何故バレては駄目なのかという理由は見つかれば十中八九神界に連れ戻されしまうからである。
三つめのものは【過ぎ】なければいい（まあ変える気満々なんだが・・・）

そこでこの条件を踏まえて願い事をどうぞと言ったんだが、急にエ

ルスが俺の顔面に癒着している物・・・まあ仮面を指で差しながら質問してきた

「さっきも言っただろう？ファッションだ」

「嘘ね、じゃあなんでその仮面何も模様が無いの？おかしいじゃない」

そう俺が付けているこの仮面はなんの模様も装飾もない純白仮面なのである、いや別に下手な模様が描いてたりしたら厨二病だと思われるじゃん

「・・・でこの仮面がどうした」

まあ何が言いたいかは分かってんだが・・・

「「その仮面を外せ」」

ほらきたやつぱり！しかもこんなところで双子の本性（ただ息がピツタリなだけ）を出すし！

「拒否権を発動する！」

この顔を見せた後の惨事は分かりきっているんだ！

「くつくくだがお前に拒否権は無いぞ」

それはどういう・・・ああ

「つまりそれが願いと違っぞ」「・・・というത്？」

すると二人がニヤニヤしながらエヴァが口を開いた

「さつき私達は神威を助けてやったよな」

「むっ．．．まあそうなるか．．」

確かに殺されそう（傷も付かないが）だったしな

「私達は悪の魔法使いよ」

ってまさか．．

「助けた代価を忘れて無いか？」

それかああ．．．！！！！てかどんだけ息合ってたよ！打ち合
わせでしてたのか！

「ほ、ほかに何かないのか？た、例えば君達の絶壁をどう」殺し
てやろうか？」すみません、いやでも！

俺は結構必死だ

「何故そこまで素顔を見せたくないのだ？」

「ええと．．．！そうだブサイクなんですよ！いやこんな顔人に見
せ」「嘘ね」．．．．」

「いやあんた馬鹿でしょ何がそうだ！よ、ってことは．．．怪我？」

もうやだ
・
・
・
・
・
・
・
・
・
o
r
t

仮面（後書き）

感想をお願いします

エルの苦勞（前書き）

サブタイトルおかしくね？と思った方、正しいです

エルスの苦勞

佐々宮 春日 side

「なんでこんなつままないのかしらね〜!!」

ほんとつままない!何?この世界、異世界人も超能力者も未来人も宇宙人も魔法使いもいないなんてどんだけくだらない世界なのよ!あゝもゝつままない!!

「他の世界に行きた〜〜〜い!!!!!!」

今私は自室のベットで大の字になってこの糞つままない世界に文句を言っている、あゝ特に魔法使いに会いたいわゝ

「うがーっつままない〜〜!!!!!!」

今日もわたしは憂鬱だ

「ったくいつもいつも五月蠅いなゝ」

すると突然男の子?の声が聞こえた

「誰!!」

部屋の隅っこに不満そうな顔をした身長145cm位の男の子が立

っていた

こいつは・・・うん知らないわ、てゆうことは不法侵入ってことね、調度むかついてたしぶん殴ってから警察に引き渡そう、うんそうしよう

「いやいやか弱い小さな男の子をストレス発散用具にするなよ」

こいつ私の思考を読んだ！？

「あんた何者！」

「神様だ！」

・・・マジ？

「そうだよ」

「まあ確かによくあるパターンこちらの考えを読む」神が発動してるけど・・・」

「？何それ？」

首を傾げる神（子）「神（子）ってゆうな！」

「マジで神なの！！じゃあ何かやって見せてよ！空飛ぶとか魔法使うとか！！」

やっと「普通」じゃないものに出会えたわ！！

「まったくほんと五月蠅いな、僕も忙しいから手短に話すよ」

「？何を？」

「君この3年間毎日毎日つまんないつまんないばかり言ってるし、しかも何故か僕に声が届くし・・・耳にタコができるんだよ、そこで君には他の世界に行っても」「ほんと!!」「ああ」

「やったわ！これで長年の夢が・・・ってまでよ」

「どんな世界？」

「まさかこの世界みたいな世界だったらいやよ」

「ネギま」

「は？漫画じゃん、ってまさかこれってよくあるデンプレなの!」

「デンプレ?・・・ああ人間の妄想の産物が、んまそんなもんかな」

「じゃあ!!」「ただし!!」・・・何？」

「何かチートな能力とか与えないから」

え・・・

「別に僕は誤って君を殺したとかやってないしそんなものあげる義理もないしね」

「ぐっ……」

「まあ転生先とちょっとしたことならいいけど」

ケチだ、だから小ちゃいのよ

「止めるよ？」

「すみませんでした」

「で、どうするの？」

「んーじゃーエヴァの双子で頼むわ」

「因みに理由は？」

「だって一人で600年間も人間から拒絶されてるのよ！！酷くない！？どうにかして吸血鬼にならないようにしと」
「ああそれ無理」
「なんでよー！！」

「そう運命づけられているから遅かれ早かれ吸血鬼にされるよ」

「……だったら私がエヴァとずっと一緒にいてあげるわ」

「ふーん……（どうやらしつかりとした心構えだね、ならいいか）
じゃあ君も一緒に吸血鬼なるようにしとくね」

「そうしてちょうだい」

「ふむ、じゃあまとめて説明するよ、まずネギまの世界に転生、エ

ヴァの双子、前世の記憶はどうする？「有りで」了解、でもまあ赤ん坊から自我があると色々大変だから吸血鬼になった時に記憶が戻るように設定しとくね、「サンキュウー」まあこんなもんか、何かちよつとしたことなら叶えてもいいよ」

「じゃあ私が吸血鬼になったときに魔法書くれない？私達の身を守れないから」

「んゝまあそんなならいいか、サービスで初級、中級、上級の魔法書の三つを贈呈してあげるよ」

「あんがと」

「（軽！）はあゝ、じゃあ早速いつてらっしやゝい」

「ええ」

そしてこの世界から 佐々宮 春日 の存在が消えた

「ハアこれで五月蠅い奴が消えたゝさてと仕事仕事」

仕事熱心な神であつた

何処かの貴族 side

「産まりました！！マクダウエル様！！元気な双子です！！」

「おお！産まれたか！！双子だったとはな、性別は！」

「はい！どちらとも女の子です」

ほおゝ二人共美人に違いない！！絶対そうだ！！

親馬鹿決定

「良く頑張ったぞ！お前！」

「ええあなた、可愛い双子なこと、金髪の女の子と銀髪の女の子よ、
それであなた名前はどするの？」

「ああ、では金髪の子は エヴァンジェリン・マクダウェル、そして銀髪の子は エルス・マクダウェルだ！」

こうして私、エルスが産まれた

エルス side

今日は私とエヴァの10歳の誕生日なの！みんなから沢山プレゼントを貰えたんだ！！嬉しいなゝ・・・・・・・・でも今日はもう眠い・・・・・・・・

悲劇が待ち受けているとも知れず私は安らかに眠りについた

「うゝん、ん！！！！此処はどこ！エヴァ！！」

起きたら寝ていた場所である筈のベットではなくうす暗い殺風景な部屋で寝ていて隣でエヴァが寝ていたの！

「んゝどうしたのエルスゝって、はっ！此処は何処！？」

「わかんんゝハッハッハ！！実験は成功だ！！」誰！」

目の前に知らない人がいた

「くつくつく喜びたまえ君達は私のおかげで真祖の吸血鬼になったのだ!!」

「なっ!!」

意味が分からない、何を言ってるのこの人は吸血鬼?何を・・・はっ!!!

私が混乱していると突然前世の記憶を思い出した、それからの行動は速かった

「エヴァこの糞を殺すよ」

「うん」

どうやら吸血鬼になったときにエヴァはちょっと変わったようだった

「さて君達w「黙れ死ね」ガハッ!・・・な・・・」

私がこの糞の頭部を粉碎しエヴァは爪で心臓を貫いた、真祖のせいか殺したことによる忌避感は無であった。

仇は討ちました、お父様、お母様私達は頑張って生きていきます!!

混乱しているエヴァに今回の事柄を説明しこの城にこのままいるのは危険だと言う事を告げ旅に出ることになった

「あの男！！よくもお父様とお母様を！！くそ！！」

あれ？なんかもう口調変わってない？いや早くない？

「エヴァ？お父様達の仇は取った、だから私たちはお父様達の分まで精一杯生きよう？」

「ク・・・・ああそうだな」

か、変わってる！！

こうして私達の旅が始まった

旅を初めて数ヶ月、最近ついに魔法使い共が現れ始めた。今の所は真祖として肉体能力で蹴散らしているが上位の魔法使いがくると危険なので私達は魔法の練習を始めた（魔法書は私の部屋に置いてあった）

それと私が転生者ということを話し本来私は此の世界に存在しなかったことを伝えたと、いてくれてありがとうと泣きながら言ってくれたとき転生してきてよかったと心から思った

「魔法の射手 氷の64矢！」

「魔法の射手 火の64矢！」

氷と火の矢は敵の障壁をいとも簡単に破壊し敵を貫いた、今日もまた襲撃者を無双している

「雑魚が雑魚らしくしていればいいものを・・・」

「ほんとね」

因みにエヴァは氷系と闇系が得意で私は火系と闇系が得意なのよ、闇が共通で良かったよ、うん

100年後

飛びすぎだというツッコミは勘弁してね修業＋無双しかやってないしね。あゝ今日も星が爆発してるねゝ、【世界の終わり】とかいう奴なんだけどなんなんだろうねあれ

そしてその翌日

私達は神威と出会った

エルスの苦勞（後書き）

すいません！！ほんとすいません！！最期力尽きちゃって・・・誠に申し訳ありません！！

アーティファクト（前書き）

何か最近調子がでない・・・

アーティファクト

あれから二百年程経った、巫山戯るなというツツコミは勘弁してもらいたい。因みにあれからというのは旅の同行を願い出た時からだ、この二百年間特に大きな出来事は無かった、適当にぶらつき賞金目当ての糞共を蹴散らし、俺が作った高級レストラン級のフルコースを食い（同行者としての義務だそうだ）、新魔法を考えるたびにどかの無生物惑星を消滅させ星座が消えていき遣りすぎだといわれ二人に殴られ吹き飛ばすという非日常という我らの日常を心置き無く過ごしていたのだが

「どうやら魔法使い共が大規模な軍隊を結成して私達を討伐にくるそうぞ」

買い物に出かけた時に聞いたそうぞ

「またか・・・で今回は何人位かな？」

俺は最近創った空間型情報収集システム「ヴェーダ」を起動させた、情報収集をしようと思ったがアカシックレコードを使うと神々に使用がばれてしまい俺が連行されてしまうのでそれを回避するために創った代物だ、こいつは電子並の大きさのAIを惑星全土に散布し知りたい情報が瞬時に俺の脳に伝達されるのだ。つまり隣の奥さんは浮気しているのか？税金を横領している政治家は誰か？等が一発で分かってしまうのだ！！

「ほんと便利ねそれ」

「実質俺しか使えないしな、情報量が膨大過ぎて常人が使うと精神崩壊しちまうからな、っと分かったぞ、おっ結構多いな1万人程か」

「ほゝ中々多いな」

「確か今回は神威の番よね」

「ああ・・・そういえばそうだな」

最近襲撃者が来なかったから忘れてたぜ

この順番はウザイ奴ら（賞金稼ぎ）を蹴ちらすのを順番に担当するシステムだ

「じゃあ早速行ってきなさい アデアット」

「アデアット」

アデアット———そうアーティファクトであるつまり仮契約である、誰がやったかゝなどは愚問で俺である
あの「願い事」でどちらとも

「「仮契約をしろ！」」

だそうだ（楽なものでよかったぜ）、いざレッツ仮契約！すると

「わ、私はアーティファクトが欲しいだけなんだからね／＼／」

「わ、私と仮契約出来ることを光栄に思っただな／／／」

ツンデレダブルでした、因みにどちらとも俺が主だ。二人がギャーギャー五月蠅かったが仕方がないじゃないか、何故か俺が従者じゃ出来なかったんだよ

「・・・多分存在自体の位が神威の方が高いからじゃないか？」

「いやでも今俺「真祖」の吸血鬼だよ？」

「・・・神威の場合「真祖」じゃなくて「神祖」の吸血鬼なんじゃない？」

「あゝ納得そうかもしれない、元が神だし」

神と吸血鬼の融合体か？俺は？

んでまあ渋渋やらないよりはましだーってこで俺が主で仮契約した（分かってると思うが方法はキスだ）

仮契約カードがどちらとも虹色だったのは言うまでもない

そして二人のアーティファクト

エヴァ

<総てを見通す探索者>

本型

能力

指定した範囲内の生物、地形、建築物等の総てがホログラムとして映し出される、もう1つは指定したものを範囲内から見つける、最大範囲は惑星一つ分

エルス

<空の飛ばし屋>

指輪型

能力

指定した場所に瞬間移動をする。指定決定の場合は具体的な位置でなければならぬ、最大人数10人

いやもうチートでしょこれ、エヴァのは戦闘向けではないが探索機能としては完全チートだ

エルスの<空の飛ばし屋>ってもうなにこれ？瞬間移動で、縮地とか瞬動とか意味ないじゃん、てか最大人数10人って多過ぎだろ！！

そしてこの二つのコンビネーションがやばい

「どこだ・・・お、いたいた」

「OK、此処ね」

探索↓指定↓移動

つまりどこでもドアの出来上がりというわけだ

「敵陣のド真ん中に瞬間移動させんなよ!」

「あつそれいいね!そうしよう!エヴァ!」

「ああ、よしいいぞ」

「ちょっと待て——」

「頑張つてね」

今日も神は頑張ってます

アーティファクト（後書き）

最近何かつまらないですね・・・

神（前書き）

今気付きましたけど神威の初動キーの最初とエルスの名前って同じですね・・・

神

「な！貴様は【真祖の下僕】！！」

瞬間移動された後の第一声がこれだった

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

周りの奴らが俺から離れて戦闘姿勢になって俺に殺氣を送ってきた、因みに【真祖の下僕】〜というのは俺の二つ名だ、実に不愉快極まりない！！！！何が下僕だ！巫山戯んな！！

「あゝ貴様ら俺は機嫌が悪いんでちやっちやと帰ってくんね？」

「何を馬鹿なことを言っている貴様を倒す為に我々は集まったのだ！正義の名の元に此処で貴様を殺す！！」

あー今日はなんの料理作ろつかないオムライス？いやカレーライス？うーん晩御飯のメニューを考える母親の気持ち分かるぜ

何をくまで聞きどうでもよくなつたので今日の晩御飯を考える神威であつた（だから下僕って言われるんだよ）

「む？何か馬鹿にされた気がする」

「何を独り言を……みんな! いくぞ!!!」

総勢1万人が呪文を唱え始めた

（えゝまた独り言で殺されそうなんだけどゝ）

「はっはっはこれで終わりだ！化物！！」

神威に向かって炎やら雷やら矢やら色々危ないものが迫ってきたに
対し神威は――

「よし！ビビンバにしよう！！」

韓国料理をディナーに決めていた

ドガドガガーン！！！！！！

盛大な爆音を出し各自の放った魔法が着弾し辺りに煙が立ちこもった

「や、やったか！？」

フラグ的なことを言った奴がいたが――

「えーと、キムチと卵とひき肉と・・・」

煙が引いた先にいたのは――

「む、無傷だと――!」

無傷の神でした

つてか神ですから――

「まあ巫山戯てないでちゃんとやりますか」

「ひっ!」

因みに今の俺の服装は闇黒色のフードで全身真っ黒の魔王服装だ

「エルス・ゼル・デルト 旋風 広範囲武装解除」

俺が作った新魔法 旋風 広範囲武装解除 半径二キロ圏内の身につけている武装「のみ」をはじめ飛ばす魔法、どっかの薬味のように服装まで吹き飛ばすのではなく武器に限定させた魔法だ

「な――!」

「うわ――!」

「なんだと――!」

「きゃっ――!」

「おわっ――!」

1万人の武装（杖、指輪、防具、剣）をはじき飛ばした

「さて、正当防衛を実施させていたただくよ」

「ひっ！！！」

「ただいま」

「おかえり〜って早いな！！」

「まだ10分しか経って——ってあんたなら当たり前か」

「はっはっは、まあな」

俺がどう正当防衛したか——まあ簡単だ、ぶん殴って全員気絶させて両手足を縛って近くの村に輸送しただけだ

この行動を十分で行うのは神ならでわだろう

しかし輸送した村に討伐隊と一緒に手紙も送っておりこう書かれていた

次また来たときは 殺す

と。

神（後書き）

サブタイトル適當すぎだろ・・・

現状報告（前書き）

戦闘無いですね・・・

現状報告

朝午前7時

俺の起床時刻だ。俺が創った「別荘」で俺達は睡眠をとっている。如何せん部屋数が多いので126から3部屋に変えた。どうやら俺は専属コックにでもなったように毎日俺が朝、昼、晩全ての食事を作っている。俺の調理テクニク舐めんなよ！能力無しで1000兆年もの月日を掛けたんだぜ？・・・まあ最初は大変だったな、作ったもんを通行人に味見させたら白目向いて痙攣させちまったからな・・・まあいい思い出だ！うん！

原作でもそうだったがやはり吸血鬼は朝に弱いようで正午12時位にしか起きない、それまで俺はいつも散歩している。

俺の警告状や毎回速攻撃退していたおかげか最近では賞金首狩りはこなくなった、因みに俺の二つ名と賞金は「吸血鬼の

下僕」「魔王」「神速の神祖」等等色々ある。ってか「神速の神祖」ってえ？何で知ってんの？神祖のことエヴァとエル

ス以外知らない筈だが・・・まあ気にしないことにした。で、賞金が1000万\$だ・・・っておい！何でエルスとエヴァより俺の方が高いんだよ！自慢じゃ無いが人殺してないぜ？不殺を貫いてんのに何故だ！

理由

神威がお遊びで巫山戯た撃退をしていたからである。例えば千年殺し百連発や象の糞を相手に向かって投げまくる等の屈

辱以外の何者でもないことを行つた。

因みにエルスとエヴァは原作とは少し違い「金と銀の不死」「童姿の闇の姫君×2」「闇の福音×2」など二人で一つの物が多い。賞金は別々だが同じ600万\$だ。

まあそれは置いて（実際あんまり気にしてない）、散歩というよりどっちかっていうと新魔法の開発を考査しているのだが如何せん威力がでかすぎて9割が没になってしまふ、・・・残念ながら今俺は常時「全センス」を発動している何かやるうにも百年単位以上習得にかかるので仕方が無いのだ・・・

「チャチャゼロ」

「ん？何だ？」

エヴァとエルスの共同作業により作ったチャチャゼロ、外見は原作と同じだが言葉が片言じゃないし戦闘能力も倍に近い力量だ。魔力配給は何故か俺がすることになっている。

「料理出来たからあいっすら起こして来てくれ」

「ああ、分かった。食ったらまた切り合おうぜー」

「あーはいはい」

戦闘狂は変わらなかったのが残念だ

こうして「今日」が始まるのであった

現状報告（後書き）

短
つ
！
！

日本へ行こう（前書き）

実は作者のコンピューターは家族共有なのであまり長く打てないのです・・・

日本へ行く

「そつだ日本へ行く」

「本当か!」

「あ、ああ」

「やつたああゝゝ!」

「どんだけ行きたかつたんだよ」

「今日もまた特にやることのない日をだらだら過ごしていた」

「でもなんで?」

「神鳴流習いたくてよ、まあ後ついでに観光?」

「その神鳴流か?お前は一瞬で覚えれるんだから習わずに観るだけでもいいんじゃないか?」

「全センスですね、はい」

「なんだよねゝ能力無しで習つたら多分数千年と惑星数億個が犠牲になるしなゝ」

「……やめてよね、マジで」

「やらんやらん、んでもどうしよっかなー一瞬で覺えたら変な目で見られそうだし……」

「だったら決闘紛いに習得す」それだ!!!!!!」おわっ!」

「戦いながら相手の技を盗む! ナイスアイデアだエヴァ! 頭いいな!」

「ふ、ふんもつと褒めろ／＼」

「かなりせこいわね……」

「せこい? 何それ? 食えんの?」

「弱肉強食のこの世界、弱いものの技術を強者が盗んで何が悪い! ハッハッハッハッハ!!」

「神って……」

「エルスは今日もまた神の在り方が解らなくなっていくのであった」

「じゃあ行こうぜー」

「……徒歩で行くのか?」

「いやヘリコプターで」

徒歩とかやってらんねー

「「は？」」

「ヘリコプターとは何だ？」

「あ、あのねヘリコプターというのはね・・・てゆうか何言ってるの！？」

「ヘリコプターというのはだね・・・あれだ！」

神威が指を差したところの地面から魔方陣が浮き出しそこから四つの細薄い羽根が装着されている物に6つの銃口が円形に並んだ何か（所謂ガトリング）がついた物が出てきた

「うおう・・・」

「ちょっと待って！何で機関銃が装備されてんの！？戦争にでも行く気！？」

「機関銃？」

「魔法使いが攻撃してくるかもしれないから一応だ」

「要らんわ！」

「さあさあ早く乗れ！俺が操縦するぞ！」

「機関銃とは何だ！」

「エルス説明頼んだ！じゃ行くぞ！！」

「神威が操縦して大丈夫なのか！！！！？？？？」

当たり前だ！

「それじゃあ日本に向かってレッツゴー！」

「この時代にヘリコプターは有り得ないでしょ！！！！！！」

この行動により各地で化物が出たという伝説が出来たのは言うまでもない

日本へ行こう（後書き）

やっぱり短っ！！！！！！

へり（前書き）

馬鹿みたいに短いです

へり

「・・・・・・・・」

「おいおい大丈夫か？全くそれでも最強種か？」

今最強種である二人の真祖の吸血鬼はへりの隅っこで肩を抱いてガクガク震えながら縮こまっている。

どうやらへりの高度が高すぎてビビりまくっているらしい、可愛らしいな

「お前ら魔法で飛ぶのは大丈夫なのに何が怖いんだ？」

俺は操縦席から二人に話しかけた

「・・・・・・・・怖く・・・・・・・・など・・・・・・・・な・・・・・・・・い・・・・・・・・ただ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・寒い・・・・・・・・息が・・・・・・・・しに・・・・・・・・くい・・・・・・・・」

「？俺は平気なんだが・・・・・・・・」

何でだろう？

「此処・・・・・・・・高度・・・・・・・・何？」

「高度？ああ大体1万5千mかな」

「いじめんやーい……い……い……」

ヘリ（後書き）

因みにエルスとエヴァの前では仮面をつけていません

へり駄目怖い（前書き）

あれよく考えたらこの小説のタイトルの「神による原作介入」の原作介入ってまだ一回も行っていないじゃん！！というか原作何時逝く！？

へり駄目怖い

俺達は今へりの残骸が浮遊している海面に揺られていた

「何やってんだよ・・・」

「か、神威が悪い！」

「いやこれはお前らが悪いだろ！」

まあ確かにへりの急上昇・急降下は二人には悪かったとは思っている。

だがおかしいな？一応俺も同じ真祖の吸血鬼だから感覚は同じだと思っただが・・・

やっぱり神祖なのか？だが血は真祖・・・意味分からんがまあそれは置いて、

急降下し終えた瞬間操縦席から引きずり出し真祖の力で殴る蹴るの復讐と言う名のリンチをされた。

だがそれだけでは腹の虫が収まらなかったらしくエルスが「燃える天空」を闇の魔法で掌握しやがり、

エヴァは「えいえんのひょうが」を掌握し、身体強化状態でまたり

ンチを存続し常人なら一万回死んでいる程だ。

燃やされ、凍らされるを繰り返されるといふ地獄だ

だが当たり前だがその余波をヘリが耐え切れるはずもなく高度百m程の高さでヘリは爆発し爆破による

衝撃で海にそのまま三人揃って仲良くダイブし今に至る

術式兵装は吹き飛ばされている間に解けたらしい

「つーかいてーよ!!!!何闇の魔法使ってただよ!!!!」

「うるさいわ!!!!傷一つ付いて無いくせに!!!!!!というか全部神威が悪いだろ!!!!!!」

「そうよ!!!!あんな化物みたいなヘリに乗せる神威が悪いのよ!!!!!!」

「う・・・・・・・・」

反論出来ない・・・・謝るか

「まあ・・・・すまなかった悪い・・・・」

「ふん、分かればいい」

変なところで双子クオリィティーを発動する奴等だ

「で、どうする?またヘリに「却下」・・・・じゃあ船でいいか?」

「・・・まあそれなら・・・大丈夫だろう、なあエルス」

「まあ大丈夫でしょ船なら」

なら思い立ったが吉日だ！

「召喚！【多分只の船】！」

普通であろう船を召喚した

「多分て・・・」

「不安だ・・・」

「いいからいいから、今度は大丈夫だからさっさと乗れ」

俺は海面を蹴り【多分只の船】の甲板に飛び乗った

「ほらほら早く！」

「「ああ・・・（不安だ）」」

エルスとエヴァが専用の座席に着席すると早速出発した

「んじゃあ行くぜ！！！！！」

結果

やっぱり普通の船では無かった、初速で音速を超え0・0003秒後には最高速度に達し光の速さで走り、

海を割り、盛大な水しぶきをあげ瞬間移動並の速さで到着した。

だがそんな馬鹿けた移動に人間が耐えられるはずもなく真祖でさえもきつかったらしく

俺はまた復讐^{リンチ}を受けたのは言うまでも無い

へり駄目怖い（後書き）

あれ？これおかしくね？という疑問待ってマース

知識

やあみんな、リンチられた神威だよ

今俺はエルスとエヴァの糸でぐるぐる巻きにされて今にも蜘蛛に食われそうな状態だ

外の状況が全くわかんないので大人しく引きずられている（扱いが酷くなってきた）

因みに俺たちの姿は現地の人達には見えない——というか存在していないようにしている、

別に交流を深めに来た訳でも無いしこの容姿を見られたらめんどくさそうだしな

『で、神鳴流というのは何だ？格闘技か？剣技か？』

死人に口無しというか念話で話しかけてくるエヴァ

『知らん』

『はっ？』

いや知らんもんは知らんよ

『そっいえば神威って原作知識ってあるの？』

『かなり断片的だがほんの少し』

よくある事ではないだろうか、自分の好みにあった本や漫画を探すとき、本を手にとりそしてパラパラと捲ってどのよ

うな本なのか等を確認する動作だ。今回神威はSS小説を本ではないがパソコンでさらさらと読み、興味を持って来た

だけなのである

『因みにエルスは？』

『300年も前の知識なんて憶えてる訳ないでしょ』

『あーまあそだね』

『神鳴流というのは名前だけ知っているのか？』

『ああ』

『はあ……どうすんの』

『？何が？』

『内容不明！居場所不明！知っているのは名前だけ！で！どうするか！と！聞いてん！のよ！』

すいませんすいません、だから蹴らないで下さい

「「ビリビリ」ったくヴェータがあるから大丈夫だ！」

いい加減蒸してきたので糸を破いて外に出た

「ああそんなのあったな、というか反則だろそれ」

「えーと、京都、剣技、魔を討つあゝ「ちょっと待て」何？」

「魔を討つって私達の天敵じゃないか！！！」

「気にすんな！！！」

「「気にするわ！！！！！」」

二人の鉄拳が顎にクリーンヒットし空高く吹き飛ぶ神威であった

知識（後書き）

げ、原作を・・・

矢文（前書き）

学校が始まり投稿ペースが遅れちゃいました・・・

矢文

「おつ、あつたあつた」

俺はヴェータの情報が示した場所を上空から見下ろしている

山中に日本古風・・・今は古風じゃないが中々の大きさの屋敷が佇んでいた

今此処にはエヴァとエルスはいなく別行動で観光をしている。

「んゝさて、どう喧kじゃなかった、決闘をふっかけっかな？」

え？なんでそこまで神鳴流に固執するかって？名前がカッコイイからだ！

（神を鳴らす流儀っていう名なのに何言ってるんだが）

それは兎も角どうすっかなゝ電話？いや阿呆だ。直接？めんどくさいな。

「うゝむ。この時代に合った伝達方法は・・・！そうだ！矢文だ！それがあつた！！」

それで俺は四次元ポケット宜しく四次元バックから弓と矢を探した

（えゝと昔貰った奴が有ったな、つとあつたあつた。）

神威が探り出した弓と矢は色々な装飾が黄金の光沢を放ち見る者をビビらせる逸品であった

「前の前の前の前の前の世界で魔王とか言う奴デコピンで消滅させたら国王がくれたんだっけ」

何気に凄いのである

「そんじゃ降りてと、よしやるか」

文章付きの紙（能力使って）を黄金矢に括り付け、矢羽を人差し指と親指でつまみ弦に引っ掛けしなるようにし、

限界までしなつた瞬間放った。矢は音速を超えそして目的の屋敷の壁に吸い込まれていった

「よし！OK！明日が楽しみだ」

そう言い残しエヴァとエルスの元へ急ぐのであった

神威が矢文にした文章

我決闘求む

場所その道場

明日午後三時

逃げんなよ・・・

逃げんなよ！神鳴流！

by名も無き挑戦者

巫山戯てんだか真面目なんだかよくわ
か・・・訂正、巫山戯ている文章であった

その日青山家は騒然としていた

突如屋敷の壁が矢により破壊されたと思いきや、

減速もせずそのまま壁、戸、置物、武具、倉庫、総てを貫き屋敷を
通過

惨事となっていた。運好く人には当たらなかったがこの矢文を見た
青山家当主は怒りに燃えたという

矢文（後書き）

感想待ってます！

超中途半端（前書き）

はっはっは・・・・・・・・

リアルが終わってる・・・・

義務教育九年目に突入しちゃったんですよ・・・

そう、受験です。

ぐああああ~~~~~!!!!!!

まだ、まだ原作すら行っていないのに・・・・

って訳で次回から更新が著しく遅くなります・・・

ほんとすみません!!!!

オリジナル解釈が多少あります

超中途半端

「死ねええゝゝ！！！」

当主っぽい奴が刀を振り上げ俺に斬りかかってくる

「ちよっ！何でいきなり！」

俺は気（元が「気」じゃなくて「神気」だったので変換した）を纏わせた木の棒で受け止める

「何故木如きで・・・」

「いや誰でも出来るでしょ」

「出来るか！」

ツッコミをし、そして又連続で斬りかかってくる

それをさばきながら疑問に思った

「（何でこのおっさんこんな切れてんだ？）」

般若を思わせる形相で斬りかかってくるおっさん

何故だ・・・

はい、回想スタート」

――

吸血鬼ツインズから離れ青山邸（調べました）に向かってまーす

「確か剣技だったよな、神鳴流」

剣技なんだから剣で対応したほうがいいと思い、四次元バックの中から剣を探している

「えーつとおつ、あつたあつた、ん？エクスカリバー？・・・」

はい却下、因みにこの聖剣は宝具とかいう奴じゃなく本家本元の聖剣で宝具はこれのレプリカだ

「こんなんで戦ったら次元が吹き飛んじまうぜ、ええと他は・・・」

」

次元破壊級、世界消滅級、惑星破壊級、・・・etc

「・・・orz」

魔王とかが泣いて喜ぶ剣しか持ち合わせてない神威であった

「くそ！全部威力が高過ぎんだよ！はぐ、まあこれでいいや」

季節は冬、枯れた木々が寂しげな雰囲気を出している

その中から何となくまだ元気ですよ的な木を拾った

「よし君に決めた！んじゃ行くか」

剣が駄目なら只の木という発想は分け分からん神威であった

そしてまた歩を進めた

「なーなー何でそんなキレてんの？」

「貴様が――」

当主が切れた理由は？神威は神鳴流を習えるか！！

次回に続く！

超中途半端（後書き）

神威：「何だこの落才ちはあああ！！！」

作者：「すいませ～～～～ん！！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5819r/>

神による原作介入

2011年4月17日18時08分発行